

MOE ANDERSEN WORLD
永田 萌 アンデルセン名作選

人魚姫

文●若谷和子



新装版

MOE ANDERSEN WORLD

Illustration by Moe Nagata



words by Kazuko Wakaya
cover design by Kazuichi Isoda
layout design by Kyoji Hamada

永田 萌 アンデルセン 名作選
人魚姫

2005年4月1日第1刷発行

発行人／小林公成
発行／株式会社世界文化社
〒102東京都千代田区九段北4-2-29
Tel.03(3262)5115 (販売本部)
03(3262)5121 (編集部)
印刷・製本／図書印刷株式会社
禁無断転載・複写 定価はカバーに表示してあります。

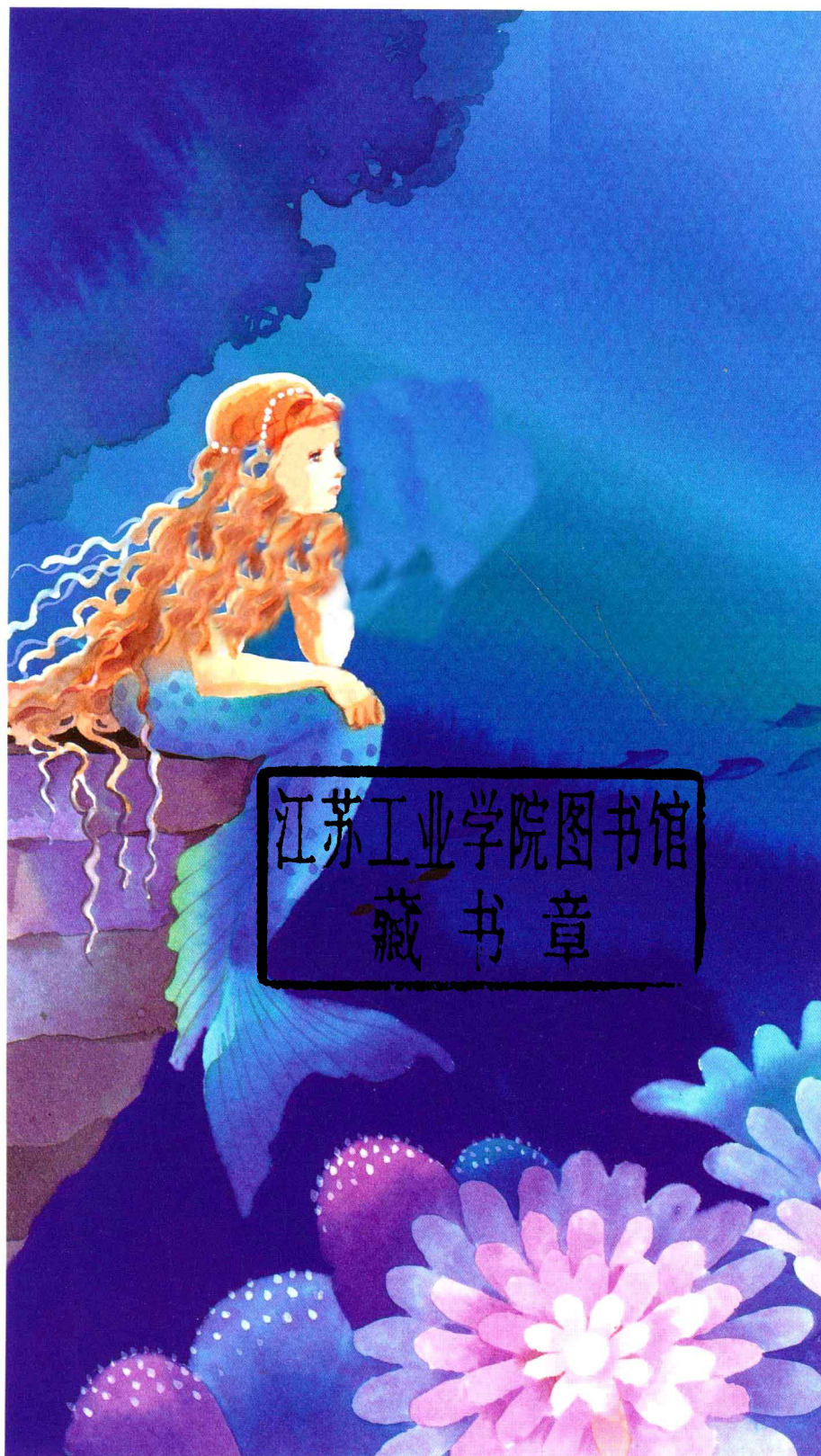
© Moe Nagata・Kazuko Wakaya 2005
Printed in Japan

ISBN4-418-05812-5

MOE / ANDERSEN

永田 萌
アンデルセン名作選
文 ● 若谷和子

人魚





ふか うみ のそこに、にんぎょ す 人魚が住んでおりました。おしろには、おうさま おうさま 王様と王様のお母様、ひめが6人おりました。おしろのまどからは、つばめのよう さかな で い に魚が出入りしています。

ひめたちは、にわ 庭に1つずつ花だんを持っておりました。いちばん美し いすえのひめは、なんぱした 船からしずんできた だいいり せき しょうねん 大理石の少年のぞうを たいせつ も 大切に持っていました。ひめは、このぞうのとなりに、ば ら いろ バラ色のしだれ



やなぎを植^うえてよろこびました。

けれど、なんといっても、みんなにとっていちばん楽^{たの}しいのは、海^{うみ}の上^{うへ}の話^{はなし}を聞^きくことでした。地上^{ちじょう}では花^{はな}がかおり、鳥^{とり}が歌^{うた}っているのです。

おばあ様^{さま}はおっしゃいました。

「15になったら、海^{うみ}の上^{うへ}に行くのをゆるしてあげますよ」



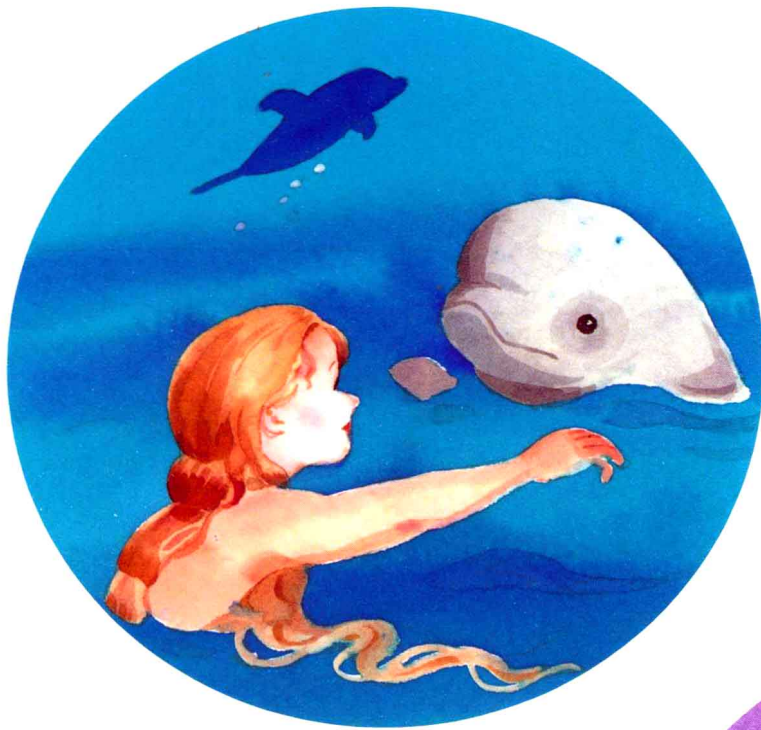
つぎとし 次^{つぎ}の年^{とし}。いちばん上^{うへ}のひめが
15になり、海^{うみ}の上^{うへ}へと上^あがって
いきました。帰^{かえ}ってきたとき
は、お話^{はなし}が山^{やま}ほどありました。
まち 町^{まち}では教会^{きょうかい}のかね^なが鳴^{ひと}り、人^{ひと}
とがざわめいているのですって。

あくる年^{とし}は、2番目^{ばんめ}のひめ。
このひめは、金色^{きんいろ}の空^{そら}とすみれ
いろ^{いろ}の雲^{くも}、ベール^{べー}のよう^るにとぶ白^{はく}
ちょう 鳥^{ちょう}を見てきました。



3番目^{ばんめ}はゆう気^きがあって、川^{かわ}
のぼ を上^{のぼ}っていきました。
「みどり 緑^{みどり}のおかに、わんわんほえる子^こ
いぬ 犬^{いぬ}がいたわ。犬^{いぬ}はほえるのよ、
こわかったわ」





4番目は、いるかとくじらにあいました。

あのこたち、大きなしおのふん水をふき上げて見せてくれたのよ。

5番目は、ちょうど冬だったので、大きな冰山を見つけました。

「わたし、氷山にすわって、かみをとかしたの。船の人が、びっくりしていたわ」



そして、5人の姉様は、そろって夕方になると、海の上へ上がっていくのでした。

6番目のひめは、たった一人のこされて、「早く15になりたいわ」と思っていました。





「さあ、おまえもいよいよ一人前よ」

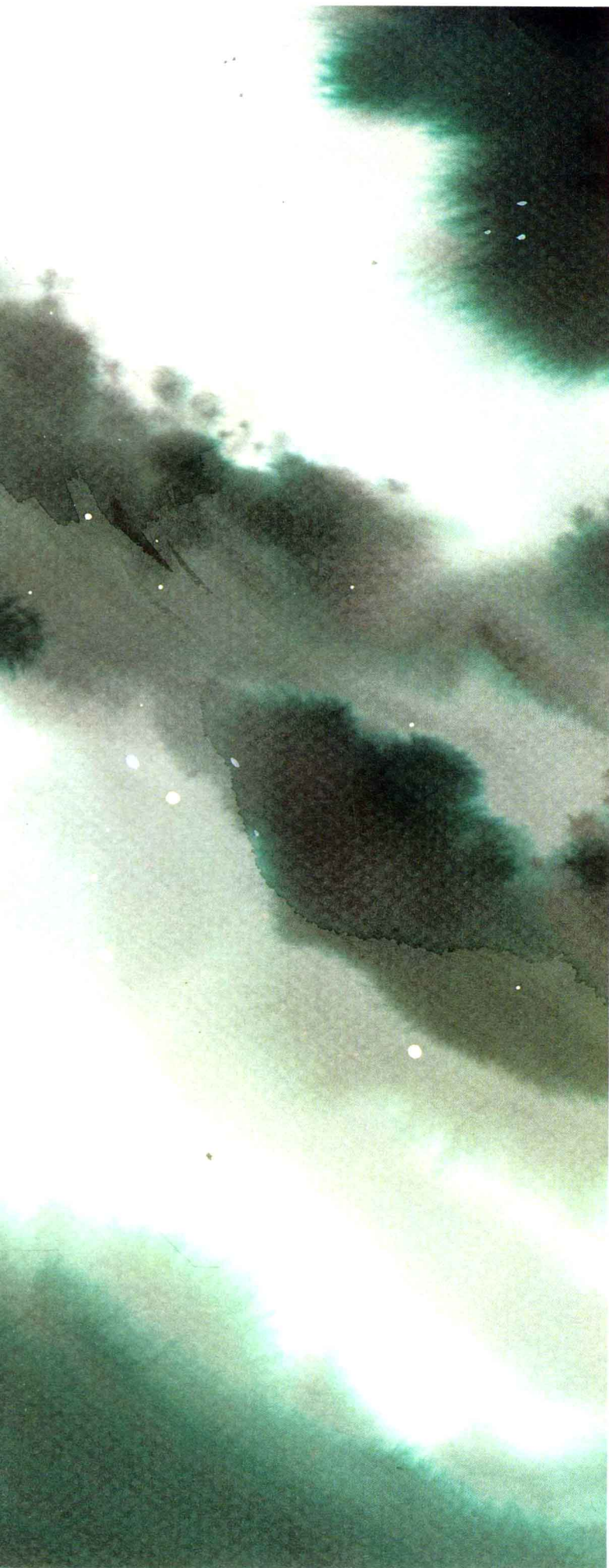
ある日、おばあ様はそう言って、白ゆりのかんむりを、すえのひめの
あたまにのせました。

ひめが水の上に頭を出すと、日ぐれのなかに1 艘の船がうかんでい
ました。ガラスのまどからのぞいてみると、わかい王子が見えました。



きょう　おうじ　じょうび
今日は、王子のおたん生日で、おいわいをしているのです。
はなび　あ　ふね　うえ　だ　ん　す　はじ
花火が上がり、船の上ではにぎやかにダンスが始まりました。
よ
夜ふけになっても、ひめはむねをときめかせて、おうじ　み
王子に見とれておりました。





ところが、いつのまにか
海^{うみ}はあれだし、船^{ふね}はメリメ
リ^りと音^{おと}をたてました。

いなずまの中に、王子^{おうじ}の
すがたがうかび上^あがったそ
のとたん、船^{ふね}は真^まっ二^{ふた}つに
われました。

「うれしいわ、王子^{おうじ}様がわ
たしのほうへおりてくるの
だわ」

でも、人間^{にんげん}は海^{うみ}の中^{なか}では
生^いきられないのです。

ひめは、むちゅうで王子^{おうじ}
をさがしました。

やがて、ぐったりした王子^{おうじ}
を見^みつけると、ひめは、王^{おう}
子^じの頭^{あたま}を波^{なみ}の上^{うへ}にささえ、
朝^{あさ}が来^くるのを待^まちました。

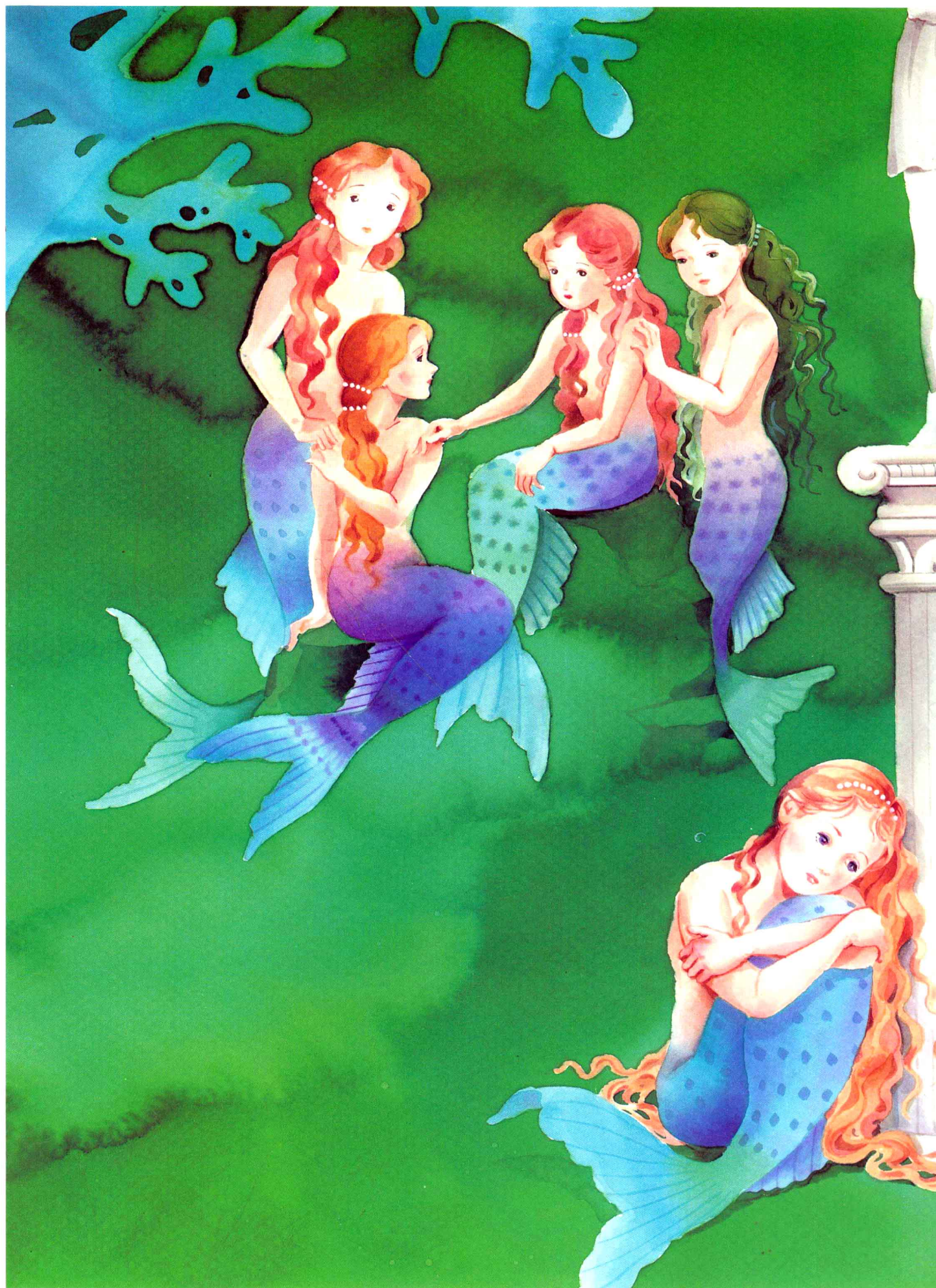
もう、船^{ふね}はしずんでしまって、
かげも形^{かたち}もありません。ひめは、
しずかな入^いりえのすなの上^{うへ}に王子^{おうじ}
をねかせ、キス^{きす}をして、
「どうぞ生き返^いりますように」
と、おいのりをするのです。

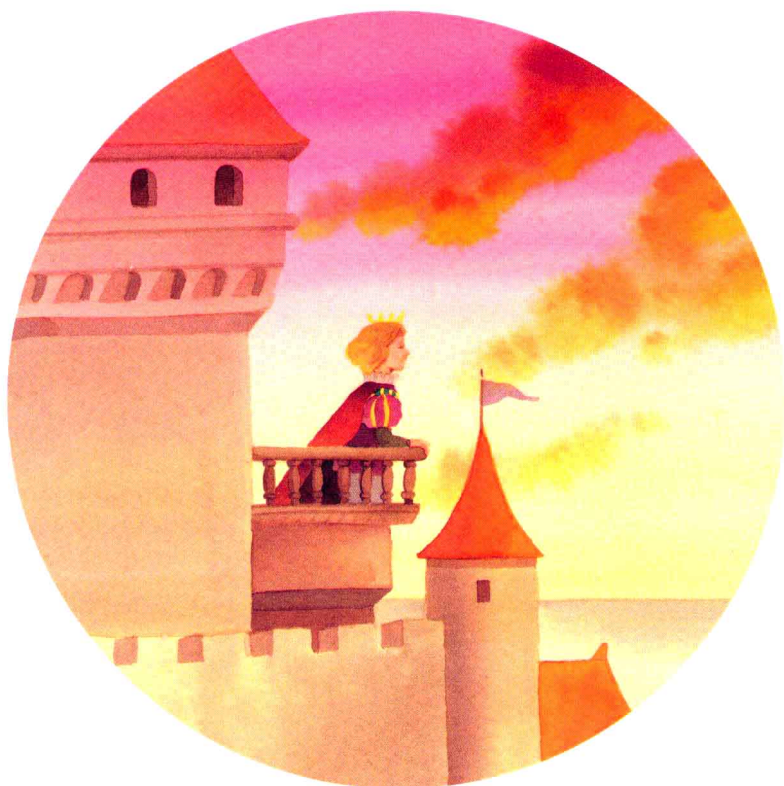
それから、ひめが、海^{うみ}のあわの
下^{した}で、だれにも見^みつからないよう
に、そっと見^みておりますと、一人^{ひとり}
の美^{うつく}しいむすめがや^やってきて、王^{おう}
子^じを見^みつけました。

王子^{おうじ}は、やさしくほほえみまし
た。や^きっと氣^きがついたのです。し
かし、ひめのほうをふり向^むくこと
はありませんでした。









ひめは、^{うみ}なくなく海のそこへ^{かえ}帰っていきま
した。お姉様^{ねえさま}たちが、
「何^{なに}を見てきたの？」と、いくらたずねても、
何も^{なに}答え^{こた}ません。

ひめは、花だんにすわって、^{おうじ}王子^かににている
大理石^{だいりせき}のぞうをそっとだきしめるのでした。

ある^ひ日、とうとうひめは、むねのひみつを
ひとり^{ひとり}のお姉様^{ねえさま}にうちあけました。

すると、それが次^{つぎ}つぎにつたわって、お姉
様^{ねえ}の友だち^{とも}から王子^{おうじ}のい所^{ところ}を聞^きくことができ
ました。

王子^{おうじ}は、おしろに^す住んでいるのです。
「たった一日^{いちにち}でも、人間^{にんげん}になれたらいいのに」
と、ひめはおばあ様^{さま}に言^いいました。





「さあ、くよくよするのはやめて、楽しいぶとう会を開きましょう」
それは、りくの上では見られない、すばらしいパーティーでした。
魚たちが、うろこをきらきら光らせてやってきます。美しい声で、人
魚のわか者や、むすめが歌います。

でも、人魚ひめにかなうのどの持ち主は、だれもいません。それで、
少しだけひめの心は、晴れましたが、また悲しくなり、どうしても王子
とけっこんしたいと思うのでした。

「ま女に助けてもらいましょう。いい知えを、かしてくれるかもしれないわ」